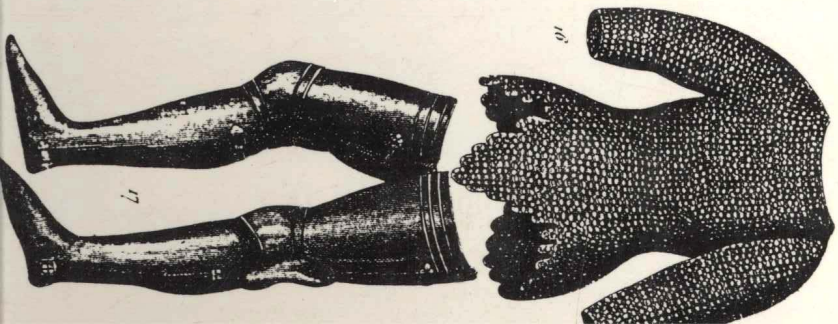


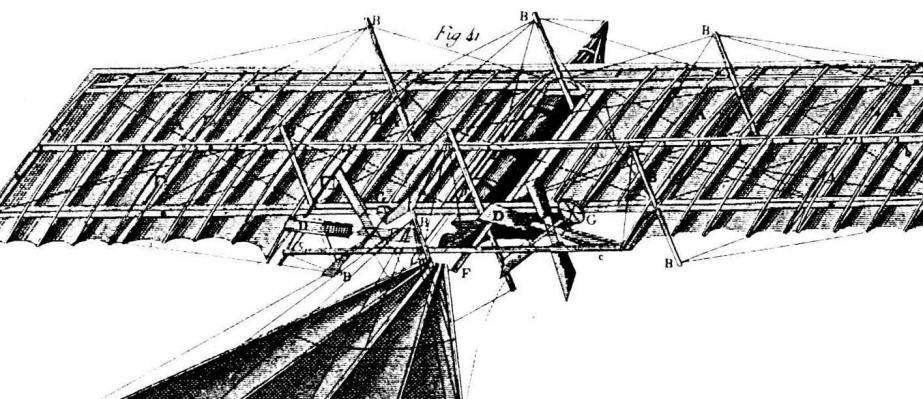
後藤明生

汝の隣人



後藤明生

河出書房新社



汝の隣人

一九八三年一月一日 初版印刷
一九八三年一月一〇日 初版発行

著者 後藤明生

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三三一二

電話 営業 〇三―四〇四―一二〇一
編集 〇三―四〇四―八六一一

振替口座(東京) 〇一―〇八〇二

後藤明生 (ごとう めいせい)
昭和七年、北朝鮮の永興に生まれる。早稲田大学ロシア文学科卒。在学中「赤と黒の記憶」が全国学生小説コンクールに入選。「関係」で文藝賞佳作。代表作に長篇小説「挟み撃ち」がある。「夢かたり」で平林たい子文学賞、「吉野大夫」で谷崎潤一郎賞、評論「笑いの方法」で第一回池田健太郎賞をそれぞれ受賞。また講談社新書に「小説―いかに読み、いかに書くか」がある。

印刷 暁印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© 1983 Printed in Japan

目次

5	『饗宴』問答	104
4	饗宴	84
3	対談	59
2	N夫人の香水	35
1	汝の隣人	7

6 海援亭にて

130

7 ソクラテスの馬

151

8 東京の夕焼け

183

9 パネルデイスカッション

206

10 吠える犬とお喋り馬鹿

226

装幀 亀海昌次

汝の隣人

I 汝の隣人

九月のある夜更け、GがKの短篇小説を読んでいると、救急車のサイレンがきこえて来た。しかしGは、そのまま読み続けた。

Kは、あのチェコの作家のKではない。日本の小説家のKである。つまりKは、Gの同業者であり、大先輩だった。したがってGは、Kのことを「Kさん」と呼んでいる。KはGのことを「G君」と呼んだ。お互い面と向ったときも、誰かに話をするときも、それは同じだった。ここ二十数年来、それはずっと変らなかったのである。

しかしKとGは、めったに東京で会うことはなかった。一つには二人の住む家が、離れ過ぎていることもあった。つまり、大東京の市街を挟んで、Kは西、Gは東に住んでいたのである。この距離はなかなか縮まらなかった。この二十何年かの間、一度も縮まらなかったといえる。その間にKは一度、引越した。Gは四度引越した。しかし、距離は縮まらなかった。故意に縮めな

ったのではない。同時に、わざわざ縮めようと努力したこともなかった。この種の努力は、もしするのだとすれば、それはGがなすべきことであっただろう。なにしろGの方が後輩であるし、年もだいぶ下だったのである。Gは四十八歳、Kはそれより一まわりとちょっと上だ。

しかしGは、その種の努力は一度もしなかった。お互いの住む距離を縮めてみようなどとは考えつかなかったようである。たぶん、それどころではなかったのだ。Gは四度引越したが、それはいつも現実の必要に迫られてだった。つまり、結婚とか、子供の出産とか、二人目の子供が生れたとか、それらの子供たちがやがて小学生、中学生になったとか。そういう止むを得ぬ事情のために、その都度必要な広さを求めての引越であった。したがって、その移動してゆく方向までは、考慮に入らなかった。実際、Kとの距離のことなど考えてもみなかったのである。

第一には、そのゆとりがなかった。それはもうのべた通りであるが、しかし、まったく考慮に入れなかったとなれば、それはそれで一つの考え方であったともいえるかも知れない。実際、GはKの近くに住んでみようと考えてみたことはない。これは、ゆとりの有無とは別に、Gの一つの考え方だろう。Kと自分とのつき合い、つき合い方とはそういうものではない、とGは考えていたに違いなかった。

ある人物と、出来るだけ近くに住みたいという考え方。これは決して珍しいことでないばかりか、自然でもあるし、また人間的だということも出来よう。その反対も、もちろん同様だろうからである。またそのために、最大の努力をすることも不思議とはいえない。誰々の近くに住むということ、住むということの第一義に考える考え方は、決して通常人の枠をはみ出すものでは

ないし、實際、そういう例は、誰だって幾つかは知っているのが、むしろふつうというものではないだろうか。そのためには他の条件をすべて犠牲にするという人物がいても、決して不思議ではないのである。

理由は、それこそ何でもよかった。便利、敬愛、巧利、友達、何々仲間、その他すべてもつともなものだ。また、親兄弟であれば、これはもう是非もないものであらうし、反対に遠い親戚より近い他人ということもあるう。それに、もともと、はっきりした理由がなければならないというものでもないわけだった。

ただ現実には、どこに住んでいても、一応の理由をきかれるのがふつうらしい。Gも引越す度に一応きかれた。そしてその度にGはだいたい似たような返事をして来た。つまり、自分の引越しは何かの主義主張によるものではないということである。偶然の場所から偶然の場所への移動ですよ、ということだった。一所不住？ いやいや、そういう仏教的なものでもありませんね。引越魔といわれるほどは引越さないし、そういうデーモンに動かされているとも思えないし。

「そういえば、それほど越すわけでもないのよね」

と、たまに出かける酒場のママさんはいった。ある晩、何かの拍子でそんな話になったようである。

「そう。だからぼくの引越しは、思想でもなければ趣味でもないですよ。また、悪魔のようなものに取り憑かれているというわけでもない」
とGは答えた。

「悪魔だなんて」

とママさんはいったが、そのときGはとつぜん何かがわかったような気がした。それは一言でいえば、彼女の性的魅力といったものかも知れない。またそれは、装飾らしい装飾もないこの狭い酒場に、毎晩男たちが押し寄せて来る（実際、運悪く満員のときに入ってきて来て、スツールのうしろの方で壁に背中を押しつけ、体を斜めに傾けるようにして立ったまま飲んでいる客もあったのである）理由の一つというわけでもあった。もちろん、男たちがそのように押し寄せて来る理由は、決して一つではない。客それぞれに幾つかの理由が、折り重なるが如く、あるいは糸が絡み合うが如く、複合されてのことだったのである。ただ、その一つが「悪魔だなんて」といったときにとつぜん気づいたあるものであることに間違ひはない、とGは思った。

もちろんGは、だからといって彼女を絶賛したい気分になつたのではなかった。つまり小なりといえども、酒場というものを営むからには、少なくともそれがなければ成立たないというもの。ただ女でさえあればよいというわけでもないというもの。たとえ道端にムシロ一枚、古ゴザ一枚を敷いて酒瓶を並べただけでも、男たちをそのまわりに呼び集めることの出来る女か、どうか。それが分れ目ではなからうか、とGは思ったのである。

そんなことは実は、何もそのときはじめて気づいたことではなかったのかも知れない。たまにはあるとはいっても、Gはもうその酒場に何年も通っていたのである。また、その酒場だけに通っているわけでもなかった。しかしそのときは、何か新しい発見でもしたような気分になっていたことも事実だ。ふと気がついてみると、酒場だと思って飲んでいたのは実は道端の古ゴザの

上だった！ 実際Gは、口にこそ出さなかったが、そんなことさえ思いついたくらいだったのである。

「しかし、引越魔というからには、やはりそれは悪魔でしょうが」とGはいった。

「じゃあ、IさんやTさんには悪魔が憑いてるんですわ」

「そういえば、こないだまたハガキが来たね、移転通知の」

「じゃあ、Mさんはどうなるのかしら」

「そうか、彼ね」

「だって、この三年間に二度ですよ」

「しかし、彼はどちらかというと、電話じゃないかね」

「電話魔？」

「そうですよ。そう、そう、こないだのあれは確かここからじゃないのか。午前二時、いや三時かも知れなかったよ」

「そうそう、そうだったわね。でもね、自分ではぜんぜんおぼえてないんですって。あのあと、見えてそういつてました」

「それは嘘じゃないでしょうね。しかし、だから、電話魔でもあるわけなんだよ」

「そうかあ。なるほどねえ」

「いやいや、感心されても困りますがね」

「でも何だか、ちょっと気味が悪いわ」

「いや、いや。誰にだって、何か取り憑いてるんですよ」

「じゃあ、Gさんはどうなんですか」

「それは、Gさんが来ない晩に、サカナにしたら」

と、すぐ隣のYがいった。Gはその晩、たまたま他の酒場でYと出会って、一緒にやって来たのである。二人は同年代の同業者だった。

「それもそうだね」

「どうせ、お互いサカナなんですから」

「じゃあ、Yさんもそうさせていただきますわ」

と酒場のママは答えた。それから彼女はこういった。

「でもね、IさんやTさんは確かに引越魔だけど、Gさんみたいに遠くへは行かないわよ」

「そりゃあ、彼らは身軽だから」

とGは答えた。

「でも、ちゃんと奥さんや子供さんもいるわけでしょう」

「いてもいなくても、身軽なものは身軽なんだよ」

「確かに彼らは、そういう人種ですな」

とYがいった。

「それとも、仕事場だけを、しょっちゅう変えてるのかしら？」

「さあ、それも何ともわからないな。わからないところが、彼らなんだから」

とGはいった。Yが、IやTに余り関心を持っていないことは、Gにもわかった。またIやTに関して、Yよりは自分の方が幾らか関心を持っていることもわかった。その違いは、当然のことながらYとGとの違いでもある。しかし、IやTに取り憑いているらしい引越魔のセンサクをする気は、Gにもなかった。

「あの人たちは、このあたりの町っ子じゃあなかったのかしら」

とYがいった。なるほどそうかも知れない、とGは思った。彼らが、大東京の副都心部と呼ばれるようになってこの盛り場の周辺を、惑星のようにぐるぐると移動し続けているのは確かだ。同時に、惑星のようであるがゆえに、そこから離れられないのも確かだった。その身軽さを、Gはときどき羨ましく思っているような気もした。また、軽蔑しているような気もした。そしてそのどちらも、自分が東京っ子ではないせいだろうと思った。

「小学生か中学生の時分に、空襲で焼かれたとか」

「例えば、そういうことね」

とYは答えた。ということは、IもTも、GやYと似たような年頃ということである。IとTは、詩人とも呼ばれ、評論家とも呼ばれていた。またジャーナリストとも呼ばれ、社長とも呼ばれていたようである。しかし、彼らの職業に就いてあれこれセンサクする気は、その引越魔に就いてと同様、Gにはなかった。あるいはあるのかもわからないが、そのときはないような気がしていた。それはYと一緒にだったためかも知れない。組合わせによって、自分の関心がどんなにも

変るものであるかということは、Gもよく承知していた。とはいえ、それは決して古いことではない。四十も半ばを過ぎてから、ようやくそんな自分に気づいたのである。

「とにかく、東京にしかない人種だね。東京以外には存在しないよ」

とGはいった。

「あ、そこがムズカシイのよ」

と酒場のママが、パズルをいじりまわしているYにいった。

「しかしね、ママさん」

とGはいった。

「いや、待った、待った。待って下さいよ」

とYがいった。GはYがいじっているパズルを酒場のママと一緒にのぞき込んだ。そして、口に出そうとしたことを腹の中で喋りながら、パズルをのぞき込み続けていた。それは自分がIやTたちとは反対に、遠くに住んでいるということだった。なにしろこの酒場からタクシーに乗れば七千円以上だ。Yの場合はもう少し近い。もちろんIやTよりは遙かに遠いが、まあ三千円というところだろうか。しかし、ここも遠いが自分とYとの家（といってもお互い四角いコンクリートの中なのだが）も遠い。たぶんここから自分のところよりも遠いであろう。しかしね、ママさん、遠いからこそ、ここでYと飲むわけなんだよ。お互いに遠くに住み合っているからこそ、こういう場所で飲むことになる。幸か不幸か、そういう時代になっているらしい、つまりこの店は、そういう時代のそういう役割を果している。お宅に限らず、この界隈の酒場がその役割を果